

イチョウ

牧 幸 男

日本の秋を彩る樹木の葉の中でモミジ類は野生種が多いのが、イチョウは植栽されたものばかりである。天に向かって伸びたイチョウの巨木から、美しい黄葉（いちようもみじ銀杏黄葉）がひらひらと舞い落ち、地面を黄金の絨毯に変える。毎年見られる秋の風景である。わが国ではイチョウは強健で抵抗力が強く、病害虫に強い植物であるだけでなく、火熱にも耐えることができるので、長命である。そのため街路樹や公園樹として植え、特に、寺院や神社の境内には多く植えられている。時折、熟した果実がその中にまじって異臭を放つこともあるが、お愛嬌かもしれない。

自生地は確認されていないが中国原産と言われている。イチョウはイチョウ科の雌雄異株の落葉性大高木で、高さ30m、直径2～3mにもなる。葉は長柄で、形は扇形で、幼木では中央の切れ込みが深く、成木では浅くなり、時にはなくなったりする。



イチョウの葉の形

雄花は花柄の頂端に二つあり、盃上の心皮の上に裸の胚珠が一つ着く。花粉は春胚珠に入りその中の花粉室で生育し、九月上旬に精子を出して受精する。種子は核果的で熟すると外皮は黄色で多肉、悪臭がある。いわゆるギンナン（銀杏）である。時に、種子が葉上にできたものをオハツキイチョウと呼んでいる。

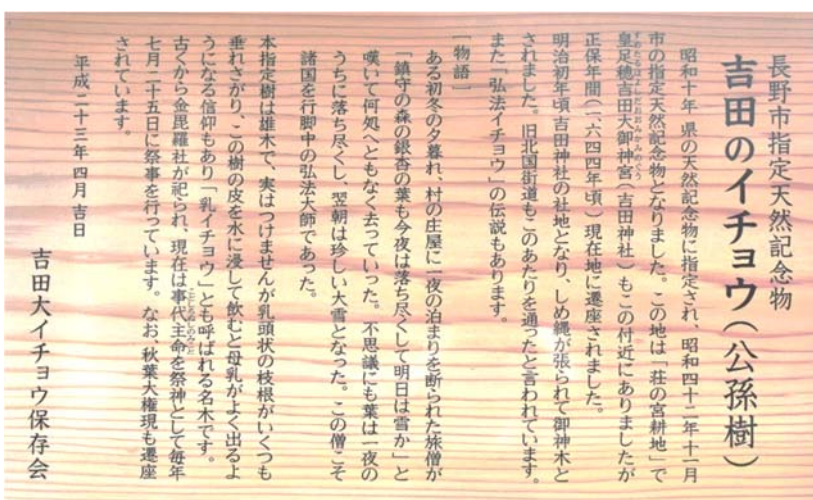
写真は長野市吉田の「皇足穂吉田大神宮旧地」の大銀杏、記録では高さ32m、直径2.7mとなっている。

イチョウは1属一種の植物で雌雄異株である。春、葉の付け根に、雄株では尾のような雄花を、雌株では柄のある2個の胚珠を持った雌花を付ける。4月頃に受粉するが9月頃ようやく精子によって受精が行われる。イチョウは高等植物で初めて精子を持つことが発見された植物で、1896年東京大学の平瀬五郎教授(1856～1925)が発見した。東京大学理学部附属施設である小石川植物園にはその株が現存し、同園のシンボルとなっている。





イチョウは、学術的には興味が尽きず、ダーウィンは「生きている化石」と呼んでいた。理由は、地史的にはペルム紀（2億9000万年前～2億5100万年前）に出現し、中生代（1億9960万年～1億4500万年）まで全世界的に繁茂した。しかし、新生代（約6500万年前）～現代に入ると各地で姿を消したが、Ginkgo biloba L. の1種類のみが中国に生き延びた1属1種の珍しい単独主である。そのため「生きている化石」と呼ばれる理由だが、国際自然保護連合（IUCN）ではレッドリストの絶滅危惧（Endangered）に指定している。



ヨーロッパではイチョウが珍しく、ドイツに日本からイチョウを持ち込んだのは医師ケンペル(1651～1716)が最初とされている。私はゲーテ(1749～1832)が長期間滞在していたワイマールを訪れた時、銀杏の苗木がGinkon の名で店頭と並んでいた。ドイツでイチョウの木が売られていることに驚いたが、その時ゲーテの『西東詩集（ブライカの巻）』（1819）の「銀杏の葉」の詩を思いだした。ゲーテは東洋から伝来した植物をモチーフとして格好の物と思われたのかも

しれない。思いを寄せていた若い人妻、マリアンヌ・フォン・ヴィレマーとイチョウの木を見ながら、その葉を2枚手に取って自分が書いた詩の上に乗せた。手塚富雄氏の訳によると、

東洋からはるばると わたしの庭にうつされたこのいちょうの葉は
賢い者のところをよるこぼせる ふかい意味をもっているようです。

これはもともと一枚の葉が 二つに分かれたのでしょうか？

それとも二枚の葉がたがいに相手をみつけて ひとつになったのでしょうか？

このようなことを思っているうちに

わたしはこの葉のほんとうの意味がわかったと思いました。 あなたはわたしの歌をきくたびにお感じになりませんか

わたしが一枚でありながら あなたと結ばれた二ひらの葉であることを？

と当時珍しかったイチョウについての詩である。

日本では、イチョウは薬種として中国から伝わったと考えられているが、時期は意則や風説程度ものが混り諸説がある。その記録を調べると、深根輔仁の『本草和名』(918)や『和名抄』(932)、『万葉集』(629～759)や『原氏物語』(平安中期)にはイチョウの記載は見られない。1323年に当時の元の寧波から日本の博多への航行中に沈没した貿易船の海底遺物から銀杏が発見されているので、その頃にイチョウが伝来したと考えられている。近衛道嗣の日記『愚管記』(1381年)に銀杏の木について、室町時代の国語辞書『下学集』(1444)に「銀

杏、異名鴨足、葉形如鴨脚一故」の記述を見ることができる。これらの経緯から1400年頃に渡来したと考えられている。それでは、承久元年（1219）の鶴岡八幡宮の石段の大イチョウの下で、源実朝が殺された歴史事実はどうなるのだろうか。この様子を伝えた『吾妻鏡』（1180～1267）にイチョウについて触れていないので、後世の創作物語かもしれない。

歴史上に話題となっているイチョウであるが、詩歌に詠まれるようになるのは、江戸時代以降である。

金色のちひさき鳥のかたちして 銀杏ちるなり 夕日の丘に 与謝野 晶子

銀杏踏で しずかに児の 下山哉

松尾 芭蕉

植物名は「鴨脚の中国宋代の音読みヤーチャオの転訛化であるというのは、大槻博士が『大言海』に発表された説であるが、近年、Ginkyoの誤綴だからとして書き直すことが、欧米の学者間に行われる傾向がある。これはLinneがkyoをkgoとしたのではなく、その原点となったケンペルの著書にkjoとするのをkgoと印刷し損じたものであるから直すならばGinkjoとすべきであるという説もある。漢名は公孫樹、鴨脚子である。」と牧野富太郎博士は述べている。その他、公孫樹は、公（父）がまいて孫の代で実ができる木という意味、また、公孫樹は、葉を黄蝶に見たてて「一蝶」であったのが、江戸時代の仮名表記で「イチテフ」となり、それがなまって「イテフ」に、あるいはイテフは「一葉」がなまった表現等の説もある。

学名はGinkgo bilobaで、属名はGinkyoまたはGinkgoの誤り、種小名は二浅裂の意味で、葉の縁の姿による。英名がMaidenhair-treeと可愛らしいのは、葉の縁が少女のブロンドの髪のカールした姿に似ていることによる。

薬用は、中国の本草学図書の『紹興本草』（1159年）に鎮咳作用の記録がある。難波巨夫著『原色和漢薬図鑑』には、イチョウ葉や銀杏、白果について少し触れているが、効能については全く触れていない。また、漢方では、呉瑞編纂の『日用本草』（1329）に簡単な記述を見ることができる程度である。

イチョウの種子は丸く、外種皮は熟すと黄橙色で柔らかくなり、強い臭みを持つ。この部分に直接接触するとかぶれることがあるので注意を要する。種子を土中に埋めるなどして外種皮を腐らせて取り除くと、白くて硬い種皮中層が現れる。この部分より内側が食用とされる銀杏である。銀杏は生薬名を「白果」と呼び鎮咳、下痢止め、通経、利尿に用いる他、葉を霜焼に利用してきた。

医薬品としてのイチョウ葉の研究は1950年代から始まり1965年にドイツのウィリアム・シュワベ博士が葉エキスを用いて脳および末梢血管の改善に効果があることを発表した。博士によって創製されたEGp761と称されるイチョウ葉エキスが、アルツハイマー型痴呆や脳血管性痴呆などの改善に一定の効果が認められたことで注目を集めた。1974年にフランスで、1975年にドイツで医薬品として開発され、脳循環不全に伴う機能障害（記憶障害、アルツハイマー症）に一般的に処方されている。

ドイツやフランスでは、めまい、耳鳴り、頭痛、低下した記憶の改善、頭部外傷後遺症、閉塞性動脈硬化症（間欠性跛行）、末梢血行障害を伴う肩こり、四肢の痛み、しびれ、足腰の冷え、眼精疲労、勃起障害等の治療に用いられている。これらの臨床に用いられているイチョウ葉エキスはEGb761と称されているシュワベ博士によって創製された世界標準品であり、乾燥葉を水-アセトンで抽出したもので、成分についてフラボノイド22～27%、テルペノイド5～7%、ギンコール酸5ppm以下等と厳格に規制されている。しかし、イチョウ葉エキスはインスリン分泌にも影響を及ぼすため、糖尿病疾患が摂取する場合医師と相談することが推奨されている。また、抗うつ剤や肝臓で代謝されやすい薬（ジアゼパム、ワルファリン等）も相互作用が生じる可能性について論じられている。

現在、EGb761はヨーロッパ等30か国以上で医薬品として利用されているが、日本やアメリカではイチョウ葉エキスは健康食品扱いである。イチョウ葉エキスを含むサプリメントやイチョウ葉を粉碎したものや茶剤としたものも同様効果が期待できるとは限らない。現在イチ

ヨウ葉は日本からドイツやフランスに輸出されている。日本では、医薬品として認可されておらず、食薬区分上は食品であるので効能謳うことはできない。

身近な民間療法としては、イチョウの木は成長すると、時としては「ちち」と呼ばれる大きな気根が下がることもある。この気根は「公孫樹の乳房」と呼ばれ垂れ下がり、乳が出ない婦人の信仰の木とされることが多い。

食用は、種子の銀杏を食用にするが、食用とするのは日本や中国など、東アジアのみらしい。但し、一度に多く食べると嘔吐、けいれんなどの中毒症状が出現することがある。日本中毒情報センターには、過去10年間の問い合わせは5~36件(2016年現在)寄せられている。この成分は熱に安定で加熱調理しても消失しない。食する目安を子供7、大人40個以下にするべきとされている。この銀杏であるが、時として種子が葉上にできることがある。これをオハツキイチョウと呼び珍重している。

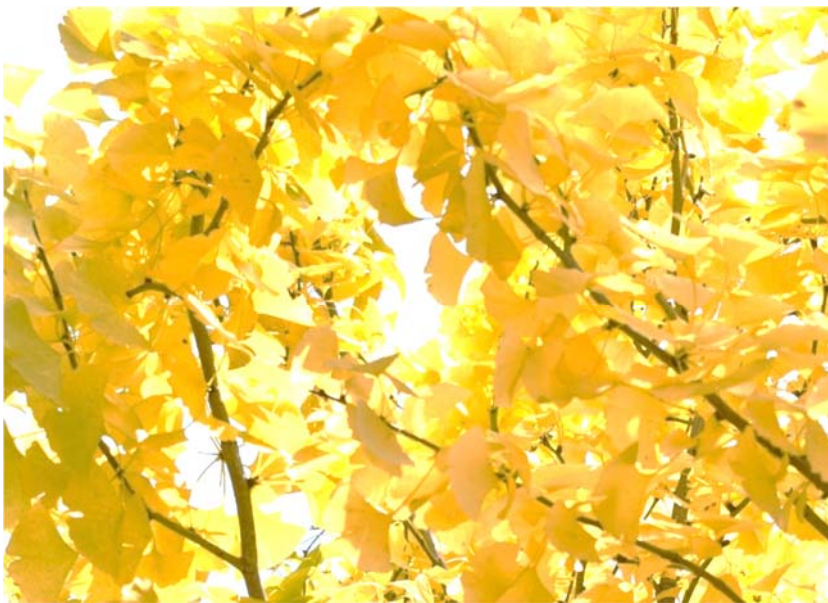
イチョウは成長が早いことから、材質は辺材と心材の区別がなく淡黄色で美しいため、碁盤や将棋盤、建具、家具、彫刻、カウンターの天板・構造材・まな板等に加工して用いられる。但し、碁盤や将棋盤にも適材とされるが、^{かや}櫃に比べ音が良くないため評価は低い。

銀杏の葉には^{しみ}紙魚よけになるので、借りた本から「栞り」代わりの銀杏の葉が落ちたりした時、ふと持ち主が忍ばれたりする。

花言葉は「鎮魂」「長寿」「淑やか」「愛と友情の印」(ドイツ)である。



イチョウの気根



松本城のイチョウ